

その27 間瀬病院の開設と坪井医師の活躍

■今月の「ふるさと再発見」シリーズ第二十七回目は、大正期に間瀬村民共同の力で開設された「間瀬村立病院」とそこへ招かれた青年坪井清治郎医師の活躍についてご紹介しましょう。

山にかこまれた漁村間瀬では、巻や吉田の病院へかかるために遠く山道をこえて通わねばならないし、夜間の急病の場合など全く処置に窮していました。このように交通不便な海岸地区にとっては、村内に病院が設置されることは及びもつかない夢のようなものでした。こうした中で、間瀬村民共同の力で、周辺海岸村にはできもしなかった病院を設立し、坪井清治郎医師を招くことができたのは、当時としては画期的な事業でありました。

そして、大正十二年五月、二十九歳の青年坪井清治郎医師が間瀬病院に着任しました。新潟医専を終えて、秋田県の扇田町立病院に勤務していた坪井医師は、「間瀬村立病院」と聞かされて新婚の奥さんを連れ、使命感に燃えて間瀬の地に赴任してきました。

しかし、坪井医師が赴任してはみたが、まだ病院の建物もなく、出資額五千万円での病院設立資金も半分の二千五百円しか集まっておらず、そこで坪井医師は民間の家で診療をはじめました。でも村人たちにとって当時は、村内に医師がいるそのことだけで大きな安堵感が得られたようでした。

それに、坪井医師は求められれば、隣村の角海や五カ浜村、野積村まで危険な海岸の岩

場道を歩いて往診していました。こうして、間瀬病院と坪井医師は、間瀬村のみでなく隣接海岸村にとっても大きな光明でありました。大正十五年、村民の協力による出資で、坪井医師着任三年目にして遂に近代的な間瀬病院の建物が完成しました。でも病院設立当時は、まだ医療器具もとほしく、手術を要するなどの重病の医療は無理だったようですが、



▲間瀬村民の協力出資により、大正15年に完成した間瀬病院。当時は村中で完成を祝ったといえます。

村民の生命をあずかる医師として、真夜中の診療やどんな時でもかけ込んで診てくれる坪井医師の情熱と村民への愛情は、なみたくていものではなかったようです。それに、青年坪井医師は、村祭時には村の青年たちと踊り歌って行動を共にし、時には地区の人たちの不景気を見かねて、冬場の内職として竹細工を指導したりして、診療以外にも間瀬村民

にとけ込み、その交流は深かったようです。

そして昭和四年七月、坪井医師は間瀬病院を退任しました。いよいよよ村を離れるその日、村中が休みとなり、村境の峠まで見送りが行われました。それに坪井医師は、村を去るにあたり、村の全戸に梅の苗木一本ずつを贈り謝意を表わしたといえます。

その後、間瀬病院は、昭和初期の不況の中で経営不振となり、昭和九年間瀬信用購買販売組合により買収され、組合員である村民の出資によって、間瀬診療所として残される事になりました。

今もなお、春には、坪井医師の贈った梅の木がそここに花を咲かせ、大正末期から昭和初期にかけて、かつてない不況下の中で仁術を捧げた青年坪井医師とその活動を支えた当時の村人たちの暖かい心の交流を今に伝えてくれています。

今回ご紹介した内容は、「岩室村史」の中から抜粋して掲載したものです。詳しくは、岩室村史をご覧ください。なお、広報いわむろでは、皆さんの地区に伝わる歴史や昔話などがありましたらご紹介したいと思っていますので、どんどん応募(役場総務課企画係)ください。また、本年も村広報活動に皆様からのご理解とご協力を宜しくお願いします。



和納小学校の加藤麻美さんが見事「優秀賞」に!!
巻ロータリークラブ

「交通標語」の募集で 皆さん、高速道路巻インターチェンジの出入口にある交通安全塔を見たことがありますか?これは、「少しでも交通事故が減少すれば」との思いをこめて巻ロータリークラブ(会長・野澤政昭さん)で設置したものです。

今回、その安全塔を掛け換えることになり、小学生を対象に交通安全標語を募集したところ、八百六十通の応募があり、和納小学校の加藤麻美(六年)さんの作品「安全をかばんにつめて 学校へ」が見事優秀賞に選ばれました。この作品、ことしの三月中は頃交通安全塔に書かれる予定です。

また、岩小の渡辺あすかさん、間小の高橋優希さん、和小の門藤政行君が、優良賞に選ばれました。



▲先月21日、賞状と記念品が手渡された